

やすぎ
だいすき

安来ふるさと読本 中学校用

未来につなごう！ わたしたちの安来



島根県安来市教育委員会

はじめに

豊かな自然が織りなす四季の風景と恵みの産物、様々な分野で名をはせた多くの偉人、世界に躍進する製鉄産業、神代から綿々と語り継がれている伝説や史実など、安来市はこのように数多くの「ひと・もの・こと」にあふれています。これらのすばらしい題材を通して学んでいく「ふるさと学習」を『安来学』と名付けました。そして、安来に生まれ育ち、また縁あってこの街で暮らし学ぶ機会をもったすべての子どもたちが、ふるさとを知り、学び、考えることによって、安来を愛し、郷土の発展に寄与できる人に育ってくれることを願って「安来ふるさと読本」を作成しました。この本は、すばらしい郷土への興味を高め、理解を深めていく手がかりとなるように構成しています。

この学習活動を通して、子どもたちが学び方やものの考え方を身につける探求活動に主体的・創造的に取り組む態度や地域社会の一員としての自覚を深め、よりよい安来を築こうとする実践力を培っていくことをめざしています。

未来を担う子どもたちが健やかに育ち、学習を深め、高く、広く羽ばたいていくことは、今後少子化を迎える日本にとって、重要なこととなるでしょう。かけがえのない大切な子どもたち一人一人が、この『安来学』によって、ふるさとを知り、ふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思うようになり、そしてこのふるさとで学び育てた力を将来存分に発揮してくれることを切に願っています。

生徒のみなさんへ

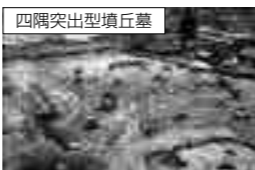
中学生は、「安来から考える」をテーマに、安来の自然・歴史・産業について小学校で学んできたことをより深く調べ、ふるさと安来の将来を考えたり、安来のために何ができるかを考えたりして、どうすればもっと良くなるのかなど、自分なりの考えをまとめる学習をめざしています。さまざまな情報を自分なりの方法で入手して、考え、実行に移す学習を期待しています。

目次

| | |
|----------------------|----|
| 目次 | 1 |
| 私たちのふるさと安来市 | 2 |
| 1 年表で見る安来の歴史 | 4 |
| 2 現代の人物史 | 9 |
| 河井 寛次郎 (陶芸家) | |
| 加納 莞菴 (画家) | |
| 青戸 慧 (工芸家) | |
| 初代渡部お糸 (安来節) | |
| 米原 雲海 (彫刻家) | |
| 伊達 源一郎 (新聞社社長) | |
| 井上 赴 (サクラ読本編者) | |
| 3 自然と産業の歩み | 14 |
| (1) 「たたら」からヤスキハガネへ | |
| (2) 米どころ安来 | |
| (3) 安来の和牛と乳牛 | |
| (4) 安来の漁業～今昔～ | |
| (5) ドジョウの養殖 | |
| (6) チューリップ栽培 | |
| 4 安来からの発信 | 27 |
| 安来が誇る名所&イベント | |
| 5 安来のこれからを考える | 40 |

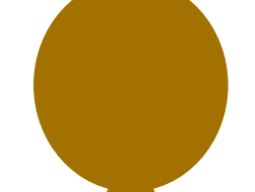
1 年表で見る安来の歴史

| 時代 | 和暦 | 西暦 | |
|------|----|----------|--|
| 縄文時代 | | 紀元前8000年 | 県内最古の押型紋土器が使用される(広瀬町菅沢遺跡) |
| | | 紀元前3000年 | 安来平野で住居生活が営まれる(安来市石田遺跡) |
| 弥生時代 | | 紀元前100年 | 安来平野で四隅突出型墳丘墓が作られる(安来市仲仙寺・安養寺墳墓群) 安来平野に大規模集落が営まれる(安来市竹ヶ崎遺跡・柳遺跡) 安来平野に高地性住居や集落が盛んに作られる(安来市陽徳遺跡) |
| | | 300年 | 安来平野西部に大型方墳が継続的につくられ(安来市大成古墳、造山1・3号墳、塩津山1号墳、東出雲町寺床1号墳)、竪穴式石室が用いられる(安来市五反田1号墳) |
| 古墳時代 | | 400年 | 安来平野に舟形石棺をもつ毘売塚古墳が作られる |
| | | 500年 | 鉄器を製作する集落が営まれる(安来市徳見津遺跡) 製鉄に関係する集落が営まれる(安来市五反田遺跡) 安来市周辺に豪華な副葬品を持つ横穴墓が作られる(高広横穴墓群、鷲の湯病院跡横穴墓、岩屋口横穴墓群、宮内横穴墓群、東出雲町島田池横穴墓群、かわらけ谷横穴墓群) |
| | | 733年 | 安来平野に寺院が建立される(安来市教興寺跡) |
| 奈良時代 | | 733年 | 出雲国風土記完成 安来・能義地域の伝承や地理も記載される |



弥生時代の後期、荒島地域には、四隅(よすみ)がヒトデのように飛び出した特異な形の墳丘墓(土や石を積み重ねて丘のような形にした墓)が集中して造られました。

毘売塚古墳イメージ図



安来駅南東約300mの丘陵の頂上にあります。形は、前方後円墳の前方(四角い部分)が短いのが特徴で帆立貝形(ほたてがいの形)をしています。比売崎の鯉伝説(月の輪祭り)縁の古墳です。



出雲国風土記に寺院として唯一名前が記載されているのが、教興寺(きょうこうじ)です。その風土記には、教興という名の僧がいて、五層の塔(五重塔)が建っていたと記されています。



飯梨川の西にある丘陵の端にあります。石室は、「石棺式石室」で最も形が整ったものといわれています。昭和23年に国指定史跡となりました。

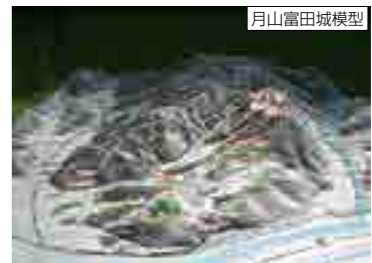
| 時代 | 和暦 | 西暦 | |
|------|-------|------------------------------------|---|
| 鎌倉時代 | | 1221年 | 後鳥羽上皇が隠岐に配流される |
| | | 1332年 | 後醍醐天皇が安来港より隠岐に配流される |
| 室町時代 | | 1468年 | 応仁の乱勃発に休山、安来十神山城を本拠とする松田備前守ら、月山富田城に尼子清貞を攻めるが撃退される |
| | | 1484年 | 尼子経久、京極家に背いて守護代を罷免され富田城を追われる |
| 戦国時代 | | 1486年 | 尼子経久、富田城に攻め入り、富田城を奪還したと伝わる |
| | | 1543年 | 大内・毛利氏、月山富田城に尼子を攻めるが撃退される |
| | | 1552年 | 尼子晴久、八箇国守護に任ぜられる(出雲、隠岐、伯耆、備前、備中、備後、美作) |
| | | 1554年 | 尼子晴久、新宮党国久・誠久を殺害する |
| | | 1560年 | 尼子晴久急死し、義久が家督を継ぐ |
| | | 1566年 | 尼子義久、富田城を開城し毛利元就に降伏する |
| | | 1569年 | 尼子勝久、山中鹿之助らと共に尼子家再興を目指して出雲国へ侵攻する |
| | | 1570年 | 毛利輝元、布部山で尼子再興軍を破る |
| | | 1578年 | 上月城が落城し、尼子勝久自害する 毛利方の捕虜となっていた山中鹿介暗殺される |
| | | 1591年 | 吉川広家、秀吉の命により出雲国東部、伯耆西部、隠岐を与えられ富田城に入る |
| | 1592年 | 吉川広家、富田城より朝鮮へ出兵する(文禄の役) | |
| | 1600年 | 吉川広家、富田城より上杉時代に出兵し、そのまま関ヶ原の戦いに参戦する | |



雲陽十一州の太守と呼ばれ出雲国をはじめまわりの国を支配下に置く勢力となりました。



山中鹿介は、尼子氏の勢力が弱まる中、尼子氏再興のために「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」と三日月に祈ったという逸話があります。



中海に注ぐ富田川の川岸、標高190mの月山に築かれた山城です。城の中に侵入するには、細く狭く険しい道を突破する必要があり、難攻不落の城でした。

| 時代 | 和暦 | 西暦 | | |
|------|----|-------|---|---|
| 江戸時代 | | 1600年 | 関ヶ原の戦いにより毛利氏の出雲支配が終わる 堀尾忠氏がかわって藩主となる | |
| | | 1611年 | 松江城が竣工し、堀尾吉晴富田より松江に移る | |
| | | 1634年 | 京極忠高、松江藩主となる。若狭土手を築く | |
| | | 1638年 | 松平直政、松江藩主となる | |
| | | 1666年 | 松平直政没す 綱隆が松江藩主を継ぎ、弟の近栄を広瀬、隆政を母里藩主にする | |
| | | | 富田川の氾濫で富田城下町が流出 | |
| | | 1668年 | 広瀬藩、祖父谷に紙屋を置く | |
| | | 1684年 | 西母里に母里藩館をたてる 藩主は江戸にとどまり、国家老が政務をとる | |
| | | 1686年 | 母里より大塚まで伯太川両側の堤防に松楮の栽培を奨励する | |
| | | 1721年 | ト蔵孫三郎、日白池埋立、新田開発を始める | |
| | | 1748年 | 広瀬の祇園神社の祭礼の余興として「通り物」が行われるようになる | |
| | | 1760年 | 母里藩、財政が窮乏し松江藩に救助を求める。 藩館を売って費用に当てる | |
| | | 1773年 | 広瀬藩、藩校「修文館」を開設する | |
| | | 1819年 | 母里藩、松原文兵衛に卯月窯を始めさせる | |
| | | 1830年 | 広瀬の長岡サダが広瀬絣を始める | |
| | 明治 | | 1869年 | 版籍奉還、松平定安は松江知藩事、松平直巳は広瀬知藩事、松平直哉は母里知藩事に任命される |
| | | | 1871年 | 廃藩置県で松江県・広瀬県・母里県を置く その後廃止され島根県となる |



若狭土手
伯太町井尻から安来にかけてこれまで蛇行(だこう)していた伯太川をほぼ現在の形に整え、両側に堤防を築き、頻繁に起こっていた水害を防ぐことによりその川筋一体に水田を開く事ができました。



ト蔵孫三郎は、水を流して土砂と砂鉄を分ける「かなば流し」の手法を用いて、山から水路を通して土砂を運ぶ方法を考え、16年をかけ、日白池を埋め立て豊かな水田に変えました。



うなぎの豊漁がきっかけで、江戸時代中期から始まり、明治末に鉄道が開通するまで150年以上も休みなく、うなぎの運搬は続きました。大坂では、「出雲屋」と名乗るウナギ屋が終戦直後でも300軒を数えたといわれています。今でも残っています。



1876年には私塾『修文館』を創設し、たくさんのおもたちを教えました数十年のうちで島根・鳥取県からの入門者は二千人を越えました。

| 時代 | 和暦 | 西暦 | | |
|----|----|-------|---|---|
| 明治 | | 1875年 | 能義郡荒島村の広田亀治が稲の新種「亀治」をつくる | |
| | | 1878年 | 広瀬絣が内国勸業博覧会、京都府博覧会で有功賞を得る | |
| | | 1898年 | 広瀬絣合資会社が設立される | |
| | | 1899年 | 雲伯鉄鋼合資会社が安来町に設立される | |
| | | 1906年 | 広瀬絣合名会社が設立される | |
| | | 1908年 | 松江—安来間に鉄道開通 | |
| | | 1909年 | 雲伯鉄鋼合資会社が安来鉄鋼合資会社と改称 | |
| | | 1910年 | 正調安来節保存会が設立される | |
| | 大正 | | 1915年 | 広瀬町で大火、363戸が焼失 |
| | | | 1916年 | 安来節家元 初代渡部お糸：松江市の千鳥レコードが安来節をレコードに吹き込み発売 安来節が全国的になる |
| | | 1921年 | 安来製鋼所で木炭銑角炉が建設され、砂鉄系原料鉄の安定供給が可能となる 以後「安来鋼」と呼ばれるようになる | |



何年もかけ、新品種として確立させることに成功しました。地元農家の評判となり、「亀治米」の名で呼ばれるようになりました。うわさが全国へ広まり、稲もみを入手しようと各地から大勢の人が集まるようになりました。



大正から昭和の初めにかけて、渡部お糸が富田徳之助とコンビを組み安来節全国巡業を行ない大好評となりました。



電気炉やつぼ炉による刃物鋼や工具鋼の生産を始める。

2 現代の人物史

安来市には、古くから芸術・芸能・教育・文化などの分野で名をなした人が数多くいます。ここでは、明治から昭和の時代に活躍し、現在も地域の偉人として語り継がれている人たちを紹介します。

かわい かんじろう 河井 寛次郎 (陶芸家)

河井寛次郎は、明治23年8月24日、安来市安来町で生まれました。幼い頃から手工に興味をもっていました。成績も抜群に良く、特に数学が得意でした。

東京蔵前の東京高等工業学校（現在の東京工業大学）窯業科で学んでいた21歳の時、バーナード・リーチ（イギリスの陶芸家）の新作展を見て感激し、その会場で壺を買い、リーチを訪問しました。高等工業学校卒業後は、京都市立陶磁器試験所で様々な研究や実験をしながら、制作にも熱心に取り組みました。27歳で試験所を辞め、琉球（現在の沖縄）や九州の多くの窯元を訪れ、更に2年後、朝鮮半島や中国東北地方の各地を訪れました。

大正10年5月、東京と大阪の高島屋デパートで初めての創作陶磁展を開きました。この陶磁展には、中国や朝鮮半島の古陶磁の手法から制作した作品がたくさんありました。毎年展覧会を開き、批評家の絶賛を受けていましたが、3年後頃から古作品を追うことに疑問をもつようにもなりました。そして、昭和4年の第6回作品展には、日常生活で使う作品を並べました。ロンドンでも個展を開きました。また、パリ万国博覧会出品作品でグランプリを受賞しました。戦後、自由に造形に取り組みたいと強く思うようになり、木彫を始めました。昭和29年には新手法を生み、鉢類や壺などを制作しました。昭和32年には、ミラノ・トリエンナーレ展でグランプリを受賞しました。その後も新しい手法に挑戦し、全霊を作品に打ち込む激しさで制作に励みました。



大正から昭和に時代が変わる頃、寛次郎の作風にも変化があったようだね。安来は、世界的に有名な芸術家を生んだ町なんだよ！

河井寛次郎の作品には、どんなものがあるのかな？調べてみたいな！



| 時代 | 和 暦 | 西 暦 | |
|----|-----|-------|---|
| | | 1937年 | 安来製鋼所が合併により株式会社日立製作所となる |
| | | 1951年 | 能義郡安来町・能義村・宇賀荘村が合併して安来町となる |
| | | 1952年 | 能義郡安田村・母里村・井尻村が合併し伯太村となる |
| | | 1954年 | 能義郡安来町・飯梨村・赤江村・荒島村・島田村・大塚村が合併して安来市となる |
| | | 1955年 | 能義郡広瀬町・比田村・山佐村・安来市大字石原町が合併して広瀬町となる |
| | | 1956年 | 伯太村が伯太町となる 日立金属工業株式会社（現日立金属）が日立製作所から独立 |
| | | 1967年 | 能義郡布部村を広瀬町に編入する 県営布部ダムが広瀬町に完成する |
| | | 1970年 | 足立美術館が開館する |
| | | 1980年 | 県営山佐ダムが広瀬町に完成する |
| | | 1982年 | 広瀬町立歴史民俗資料館が開館する |
| | | | 第37回国民体育大会が県内各地で開催される |
| | | 1994年 | 広瀬町西比田に金屋子神話民俗館が開館される 和鋼記念館が安来市に移管され、和鋼博物館として再スタートする 広瀬町に「道の駅広瀬・富田城」がオープン |
| | | 1998年 | 山陰道（米子・安来道路）安来一淀江大山間が開通 月坂放し山古墳群で鉄製の鎧「短甲」が完全な形で出土する |
| | | 2005年 | 安来市、広瀬町、伯太町が合併し新安来市が誕生する 宍道湖・中海がラムサール条約に登録 |
| | | 2006年 | 安来節演芸館が開館 |
| | | 2011年 | 「道の駅あらえっさ」がオープンする |



伊達源一郎生誕の地
昭和26年サンフランシスコ講和会議に、吉田茂首相の要請で全権委員代理として出席しました。趣味として、鳥の研究、標本収集をされており、世界各地で捕獲された1600点以上の標本が「伊達コレクション」として、島根県立三瓶自然館サヒメルに保管されています。



河井寛次郎
手工芸品を実用と美の観点から見直し、現代の実用品として良いものしようとする「民芸」運動が始められました。



韓国の民謡・密陽アリランのふるさととして有名で、韓国三大楼閣の一つ嶺南楼をはじめ多くの名所・旧跡があります。特産品はえごま、青唐辛子、ナツメ、イチゴ、リンゴなどがあります。安来市とは平成2年から国際姉妹都市となり、行政交流や民間交流を行っています。

かのう かんらい 加納 莞菴 (画家)

明治37年、布部村に生まれました。本名は加納辰夫です。昭和初期、東京の川端画学校や本郷洋画研究所に学びました。

「光風展」「二科展」等に出品し多くの友を得、画壇で活躍しました。帰郷後は教員として大塚小学校を経て、浜田の小学校に勤めました。浜田に滞在していた頃から島根独立系美術グループを立ち上げ、フォービングなタッチ、繊細な色彩で島根県に独立美術の根をおろすとともに、県西部の美術に影響を与えました。

昭和12年に朝鮮に渡り、翌年には従軍画家として中国山西省に赴きました。昭和20年、終戦を迎え島根県に帰省しました。戦争を体験する中で平和の大切さを深く感じた莞菴は、戦後、フィリピン戦犯の問題解決に向け、全生命を傾け取り組みました。当時のフィリピン大統領に直接届けた嘆願書は40数通に及びました。昭和28年には大統領声明により、戦犯は全て赦免されました。その後の莞菴は、次世代の平和は世界中の子どもの人権を守ることがスタートと考え、「世界児童憲章」をあらゆる場で訴えるようになりました。昭和29年には布部村長となり、画家としては水墨画も手がけるようになりました。晩年は病魔と闘いながら墨彩画の世界に没頭しました。



莞菴の故郷、広瀬町布部には、「加納美術館」があるんだね。

一人の画家（芸術家）として平和運動に打ち込んだ生き方から学ぶことはたくさんあるよ。彼の平和への想いを未来につなげていこう。



あおと けい 青戸 慧 (工芸家)

大正7年、焼き物業を営む家に生まれました。島田の高等小学校を卒業後、東京に出て彫刻を学びました。17才のとき商工省主催工芸展覧会に土人形「工人」を出品し入選しました。その後、紙塑人形を手がけ、昭和26年には朝日新聞現代人形美術展で特選となりました。現代工芸美術展等でも入選を重ねました。昭和35年、日本サッカー選手団の渡欧に際して、各国元首に「けまり」を贈っています。また、女性をテーマにした作品にも優れ、皇太子ご夫妻には「未明」を、美智子妃には「桃果」を献上しました。

郷土と深く関わる出雲神話をモチーフとした作品も数多く制作しました。

初代渡部お糸 (安来節家元)

明治9年、安来町の小料理屋の四女として生まれました。7、8歳頃から家計の手助けに葉たばこ製造所に勤め、そこで作業をしながら安来節を習い覚えました。家庭でも父に安来節を仕込まれました。

安来節を郷土が誇れる民謡にするために、お糸は指導を受け練習に励みました。明治末期、文部省の役人や画家の横山大観などが相次いで安来を訪れ、その際、郷土芸能として保存育成するように激励されました。

明治44年、「正調安来節保存会」が結成されました。大正時代になり、松江市の千鳥レコードがお糸の吹き込みを発売すると、出雲名物の土産品としてきわめて好評でした。翌年には神戸市に招待され、東京からはレコード吹き込みの注文も入り、公演も行いました。初めての東京公演で渡部お糸の名は全国的に脚光を浴びることになりました。その後、安来節は大阪の吉本興業社からも注目されるなど、単なる安来だけの民謡ではなくなりました。朝鮮・満州・台湾にも巡回しました。

お糸は60歳くらいまでは、第一線で活躍していましたが、昭和5年以降は家元名人の名のもとに後進の指導にあたるようになりました。功名をなしたお糸は昭和29年、79歳で亡くなりました。1周忌には安来節保存会の主催により社日公園で「お糸まつり」が開かれ、以後、毎年恒例のものとなりました。

吉本興業にも注目されるなんて、すごいなあ！お糸さんの活躍の様子を、もっと詳しく調べてみたいな。



ドジョウすくい踊りに
銭太鼓…
安来節は奥が深いよ！



よねはら うんかい 米原 雲海 (彫刻家)

明治2年、安来町に中海漁業の網元の次男として生まれました。小学校卒業後、宇賀荘村の塔大工の弟子となりましたが、やがて建築彫刻を専門に修得したいと思い、松江の石川政右衛門の弟子となりました。結婚後も単身で上京し、高村光雲の門に入りました。

明治26年、郷里安来に帰りました。翌年、安来の松源寺山門に、松江の彫刻家荒川亀齋と、浮彫の仁王像（像高80センチ）を制作しました。向かって左の像が雲海の作品です。その後、明治30年に比例コンパスを利用した技術を用いジェンナーの等身大銅像原型を制作し、この技術は木彫界の革命と評されました。また明治40年には同門の山崎朝雲らとともに日本彫刻会を結成し、その年第1回東京勸業博覧会に出展した作品「清宵」は一等賞を受賞しました。同作品はロンドンで行われた日英博覧会では金賞となりました。師である高村光雲との合作で長野県善光寺の仁王像も有名です。

だて げんいちろう
伊達 源一郎（新聞社社長）



明治7年、井尻村の旧母里藩典医の家に生まれました。
明治32年、同志社大学政治科を卒業すると、徳富蘇峰を頼って上京し、国民新聞社に入社しました。国際通信社、読売新聞でも働きましたが、その一方で中国や欧米を視察して国際的視野を広げ、大正7年には、第一次世界大戦後のパリ平和会議に日本全権随員（新聞代表）として参加しました。昭和2年にはジュネーブで開かれた世界新聞専門家会議に日本代表として出席しました。その後、国民新聞社長、英字新聞ジャパンタイムス社長に就任し、日本新聞界に大きな足跡を残しました。

終戦の年には戦災に遭い、郷里に疎開しましたが、昭和21年、島根新聞（現在の山陰中央新報）社長に迎えられ、7年間務めました。同じ時期、島根県から参議院議員にも選出されました。昭和26年のサンフランシスコ講和会議には古くから知人であった全権吉田茂の要請で日本全権代理として出席し、戦後外交にも貢献しました。



伊達さんは、世界を舞台に活躍されたんだね！

パリ平和会議やサンフランシスコ講和会議に参加したなんて、すごいことだよ。日本から世界に向けて発信した内容や、世界を舞台にして感じたことを、調べてみよう。



いのうえ たけし
井上 越（サクラ読本編者）

明治22年、松江士族足立鋏太郎の次男として邇摩郡大国村に生まれました。4年後の夏、広瀬町士族、井上永之助の養嗣子となって、広瀬町で暮らすようになりました。養父は小学校教師でした。

明治35年、高等小学校を卒業しましたが、身体が弱かったため、布部の養父のもとで勉強をしながら、身体が健康になるような暮らしをしていました。松江市立中学校修道館（現在の松江北校の前身）を主席で卒業し、大正元年には東京帝国大学国文科に入学しました。成績がとても優秀であったため、翌年には特待生になり、大正4年に卒業しました。

高等学校（現在の大学）の講師・教授を歴任した後、文部省図書監修官に任命され、主に尋常小学校国語読本（現在の教科書）の編纂にあたりました。郷土の英雄である山中鹿介を扱った「三日月の影」を掲載（初等科国語五）し、当時子ども達に感動と興奮を与えました。



「三日月の影」、読んでみたいな。僕に感動と興奮を!!

大正14年から1年間、イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・アメリカに在留し、国語教育研究を進めました。以後、農村用高等小学校読本・小学国語読本・国民学校教科書等の編纂にあたりました。「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始まる小学校国語読本はサクラ読本として愛され続けました。



井上越先生が、どんな思いで国語読本を編集したのか、みんなで考えて話し合ったり、本を読んだりしてみたらどうかな？先生も興味津々だよ!!



3 自然と産業の歩み

安来市の産業は、どのように発展してきたのでしょうか。自然環境との関連も考えながら、その歩みを振り返り、さらに今後の産業振興の方向性を探ってみましょう。

(1) たたらから YSS ヤスキハガネへ たたら製鉄

広瀬地区及び伯太地区は、質の良い砂鉄と炭焼きに適した豊富な森林資源に恵まれ、古くからたたら製鉄が行われた地域です。

飯梨川をさかのぼると、山佐川筋では、上山佐の幸谷、布部川筋では、布部の樋の廻、西比田の市原にたたらがもうけられていました。また、伯太川上流でも峠之内、上・下小竹、赤屋、上・下十年畑、草野などで鉄穴流しが行われていました。鉄穴流しにより得られた上質な砂鉄からたたら製鉄を行いました。できあがった鉄は馬で安来港まで運びました。

「たたら」ってなに？
それで、どうやって
鉄を作るんだろう？



「たたら」という言葉の意味
や歴史、「たたら製鉄」の方
法を調べてみるといいね。



金屋子神社

たたらの職人をはじめ、鉄にかかわる
様々な人々の信仰を集めています。

安来鋼からYSSヤスキハガネへ

安来の町は、たたら製鉄でできた和鉄の積み出し港として栄えていましたが、明治時代に入ると値段の安い洋鉄の輸入や洋式の製鉄が行われ、たたら製鉄が衰退していきました。このため、明治32年（1899）たたら経営者などにより、雲伯鉄鋼合資会社が設立されました。明治42年（1909）には、安来鉄鋼合資会社を設立し、電気炉やるつば炉による刃物鋼や工具鋼の生産を始めました。会社は安来製鉄所に改編されました。戦争が激しくなる昭和12年（1937）には国産工業を経て日立製作所・安来工場となりました。

安来鋼の刃物は、切れ味がよく、ねばりがあり、刃こぼれせず、英国王立研究所で世界一との評価を受けました。戦後は、日立金属・安来工場へ受け継がれました。

品質はその頃もっとも評価の高かったスウェーデン鋼に匹敵し、世界に羽ばたくため

「YSSヤスキハガネ」というブランドへ改められ、その名を世界に知られていくようになりました。

吟味された原料を使用して、電気炉、真空溶解炉、炉外精錬設備など最適な組合せにより溶解精錬され、熱間加工、冷間加工、熱処理を経て品質を作り込み厳格な品質管理のもとに生産されます。

鍛造用、冷間プレス用、プラスチック成型用の金属材料や切削工具類の工具用材料、リードフレーム材やスパッターリングターゲット材などのエレクトロニクス関連材料、自動車や航空機部品、火力発電用部品などの産業機器材料においては、世界のリーダーとして確固たる地位を確立しています。

近年では、神戸製鋼等の共同出資で、世界で初の油圧式5万トンプレスが新設され、航空機の国産化を目指して、航空機用大型部品の製造も始められています。

日立金属の関連会社もたくさんあるけど、どんな製品を作っているのかな？



「ヤスキハガネ」が世界に通用するようになるまでには、長い道のりがあったようだね。その歴史を和鋼博物館で調べてみるのも、おもしろいね。



コラム

『たたら製鉄』の伝統や技術を、 どうやって伝えているのだろう？



やすぎ刃物まつり

安来市を含む出雲地方一帯は古来より製鉄が盛んで、「たたら製鉄」が今も伝えられています。その伝統や技術は絶えることなく、「鋼のまち 安来市」の産業を支えています。この製鉄の歴史を基盤にイベントとして開催したのが「やすぎ刃物まつり」です。

このイベントでは、刃物や鋼の歴史に触れたり、全国各地から集まった職人の「匠の技」や品質の高い包丁や農具、鉄製品などに会ったりすることができます。2013年には18回目の開催となり、安来町で開催されるイベントとして広く知られています。



(2) 米どころ安来

米どころ安来を支え、広く知られた「亀治米」

米づくりは弥生時代から現在までの長い歴史の中でその栽培技術が高められていきました。江戸時代には病虫害や天候不良など、今のような安定した収量は得ることができず不作の続くこともありました。毎年きめられた年貢米を収めなければならない農民を救うために、安定した米づくりを行うことが強く求められていました。

そのような背景の中、1893年（天保10年）、安来市荒島町の農家に、米づくりの歴史を大きく変えた人、廣田亀治が生まれました。

その頃の米づくりは、米の収量を増やすため水田にレンゲを育て、田にすき込むことで肥料としていました。レンゲは、根粒菌というバクテリアの仲間と共生し、空気中の窒素を取込んで根に小さな粒状の固まりをつくります。これが植物の成長に必要なチッソ肥料となることは、当時から経験的に知られていました。

しかし、やせた田を肥やすためにレンゲの量を増やしすぎると、「いもち病」という稲の病気が発生し、根を腐らせるため、かえって米の増収が見込めなくなるという悪循環になることもありました。

このような状況を何とか打ちやぶりたいという強い思いにかられた亀治は、稲の品種改良を思い立ち、近くの水田を使って研究を行いました。稲の品種改良は時間も根気もかかる研究でしたが、長い努力の末、1870年（明治3年）、亀治はついに品種改良に成功します。病虫害に強く、収量の多い新品種は「亀治米」と呼ばれ、すぐに地元農家の評判となり、県外にも広く知れ渡るようになりました。以来、半世紀以上にわたり、安来はもとより県内の主要品種として栽培され続けました。また、亀治の亡くなった後も亀治米の改良は続けられ、第2次世界大戦前後の日本の食糧不足を支える大きな役割も果たしました。



安来市で近年作られている米の品種や出来高を調べてみよう！

今でも、亀治米は作られているのかなあ？



地元の米を生かし、農業振興を図る取組

J A やすぎ米飯加工センター（島根県安来市伯太町東母里1183-1）

これまで日本の農業で米の生産はその中心であり大きな役割を担ってきましたが、農業を取り巻く環境は大きく変化し、米生産農家にとって厳しい状況になりつつあります。その中で、米どころ安来の農業を活性化する取組が行われています。

1996年（平成8年）11月、地元で生産された農作物に付加価値を付けて販売することによって、農業振興と農業経営の安定を図り、消費者に安心で安全な商品を提供することをめざして、J A やすぎ米飯加工センターが設立されました。

米飯加工センターでは、米を中心とする地元の食材を活用し、年間1,200トンの米を加工し製造を行っています。主力商品は「おにぎり」で、その他「寿司」や「ご飯」が製造され、その多くは大手コンビニエンスストア（大田市から鳥取市の各店舗）に出荷されています。市内の病院や商業施設、県外のスーパーなどとも取引されています。

米飯の製造は24時間体制で行われ、米を水に浸す時間や水の管理など細かなチェック項目を設け、高品質な食品の製造を続けています。1日の米飯の製造量は、900釜（4升炊きの釜）で、全自動のオートメーションにより1分間に1釜の割合で米飯を製造しています。1日の製造量のうち、朝食用と夕食用がそれぞれ全体の25%、昼食用が50%を占めています。2008年以降、年間では約1,800万食の製造販売を安定して行っています。

平成24年度現在の従業員は約250名です。そして、そのうち7割は市内の方で、ま



まった数の地元の雇用を生み出す企業のひとつとなっています。また、製造されている「おにぎり」は、取引先の要望に応じ、米の品種を変更したり、標準米をブレンドして新たな商品を模索したりするなど商品開発やレシピ開発にも力を入れています。米の消費拡大を含め、設立当時の目的である農業振興・農業経営の安定を図るため、たゆまぬ企業努力を続けています。

(3) 安来の和牛と乳牛

和牛のはじまり



もともと牛は、田畑を耕したり荷物を運んだり、糞尿を肥料とするために飼われていました。明治時代になって牛の肉を食べる習慣が広まるようになると、牛は食肉用としても、飼われるようになってきました。

安来でも明治10年代から洋種牛（デボン種）を導入して改良が始まりました。そして、飼育農家の努力により「井尻牛」と呼ばれる牛が産出されるようになりました。昭和28年には井尻牛「よしもり一号（雌牛）」が第1回全国和牛共進会という全国の牛の品評会で一等賞になりました。その後昭和52年に行われた第16回日本農業祭畜産部門でも最高賞の天皇賞を受賞し全国に安来の和牛の名を広めました。



乳牛のはじまり

安来市での乳牛の飼育は明治の終わり頃に始まったといわれています。このころ牛乳は病気になった時ぐらしか飲まなかったそうです。その後、飼育農家は増えましたが、どこでも1～2頭飼いの小規模なものでした。昭和3年頃から昭和20年頃になると、10頭ぐらいに増やして近隣に販売する農家もありました。

戦後、牛乳の消費量の増加に伴って、昭和22年に荒島地区に九州天草から5頭の乳牛が導入されました。やがて、他県からも導入され、乳牛の飼育が盛んになってきました。昭和28年には酪農家が集まり、酪農組合が設立されました。生乳処理場が作られ生乳販売が始まり、本格的に安来全市で酪農が営まれるようになりました。昭和36年には利弘町で飼育された乳牛が乳脂量日本一になりました。昭和47年安来乳業株式会社が創立され安来で生産された牛乳が、本格的に市内で製品化されるようになりました。



和牛や乳牛飼育の「今」を調べてみよう。和牛コンテストや、安来市の牧場を手がかりにしてみるといいよ。乳製品の開発や販売促進のアイデアを考えてみたい人はいないかな？

今までの和牛や乳牛の飼育の様子はわかったけど、近頃の様子はどんなんだろう？



(4) 中海の漁業～今昔～

安来市が接している、汽水湖である中海を舞台とした漁業の変遷を紹介しましょう。

赤貝（サルボウ貝）

養殖の起原は明治12年以前とされています。大正11年秋、境港の工事に伴い中海の水質に異変（赤潮）が発生しました。昭和5年秋に工事が完成、目立って漁獲が減少し始めました。戦後、中海に流入する悪水が減少し、中海の水質が改善しました。赤貝も大発生し、島田村では赤貝が海岸に打ち寄せられるまでになりました。しかし、昭和30年代に生活の向上につれて再び中海の汚染が進行し、赤貝も見られなくなりました。平成4年には、島根県によって赤貝復活の取組が行われるようになりました。



うなぎ

江戸時代半ばには、大阪に生きたままのウナギを運び、商いをしていました。明治時代になると輸送方法の改良が進められ、大八車で四十曲峠を越して勝山まで運び、勝山で大阪側の運搬人と交代して輸送されました。明治39年には鉄道連絡船の山陰線連絡航路が開設され、ウナギ籠に氷を入れて、船積みで輸送されるようになりました。さらに、明治41年には山陰鉄道が開通し貨車輸送に切り替わりました。

昭和に入ると、赤潮の発生により不漁が続き、全国的に養殖が盛んになり天然ものは押され気味になりました。年間7.5トンもの出荷があったと伝えられる天然ウナギでしたが、近年は極少量が料理店へ供給されるだけになっています。

ボラ



ボラは、イナ・ボラ・トドと名前が代わる出世魚です。戦後の一時期、荒島地区でボラ網の船団が組まれ、勇壮なボラ漁が盛んでした。しかし、中海の水質悪化等により漁獲が減少し、昭和35年24.4トンの漁獲高をピークに、ボラ網も姿を消しました。



モズク

十神山、亀島などの周りで多く採れていました。十神山の北麓で採れるモズクはヌメリが多くて上物とされ、安来特産「十神モズク」の名で販売されていました。

境港の修築以来、海水に異変を生じて生産額が年々減少し、昭和10年代についに姿を消してしまいました。

コラム

「中海」の歴史と自然、ミニ知識！

◇歴史

約7,000年前の縄文時代に中海の原型が形作られ、その後、海水面の低下と上昇を経て弓ヶ浜砂州（弓ヶ浜半島）が出現し、平安時代以降に現在の中海が形成されたと考えられています。かつての中海は広大な浅場があり、透明度が高く藻場が広がっていました。アマモなどの海藻草類が多く生息し、赤貝、スズキ、チヌをはじめとする魚介類も豊富に採れる豊かな漁場でした。海藻草類は有機肥料としても使われ、サツマイモや浜綿栽培が盛んに行われるなど農産物の生産も支えていました。各地に水浴場もあり快適に泳げる美しい湖でした。

1963年に食糧増産と農業用水確保を目的とした中海の干拓および淡水化事業が始まりましたが、社会情勢の変化により1971年には計画の変更を余儀なくされました。その後、水質汚染や環境破壊を懸念した反対運動や全国的な「公共事業見直し」の機運の中で、2000年に干拓事業の中止・2002年には淡水化事業の中止が決定しました。近年は、沿岸住民や関係省庁、自治体、NPOなど多様な主体が参加・連携した中海の自然再生に向けた取り組みが行われています。

◇自然

中海は汽水湖という特殊な環境の恩恵を受けて、淡水性と海水性両方の生物の生育・生息が可能です。また、これらを餌とする多くの鳥類が生息・飛来します。毎年75,000羽以上のガン・カモ類が飛来、特にコハクチョウの飛来地の南限にあたります。中海一帯ではガン・カモ類をはじめ、シギ・チドリ類等の47科、約260種の鳥類の生息が確認されています。2005年にはラムサール条約に登録されました。また植物では、リュウノヒゲ・カワモツル・コアマモなどの貴重な水生植物の生息場になっています。



(5) ドジョウの養殖

～「やすぎどじょう」^{※注1}のブランド化^{※注2}～



人口ふ化作業の風景



生まれてから3日めのドジョウの稚魚



生まれてから14日めのドジョウの稚魚



ドジョウの稚魚を育てている施設

安来市に昔から伝わる「安来節」と「どじょう掬い踊り」は全国的に有名ですが、ドジョウを養殖することはとても難しく、私たちが気軽にドジョウを食べられるようになったのは近年になってからです。

安来市では、1956年からドジョウの養殖に取り組む農家が現れました。その当時は農家の人が川などでドジョウの稚魚を捕まえ、育てて売ろうと考えていましたが、大量に捕まえるのは大変な作業でした。苦勞して稚魚を池に入れても、逃げたり鳥に食べられたりして、大きくなるものはわずかでした。

1965年から、安来市もドジョウの養殖に協力し始めました。養殖を成功させるにはたくさんのドジョウを早く大きく育てる必要があります。安来市はドジョウを研究する設備や技術を提供しましたが、稚魚を卵から大量にふ化させたり、その稚魚の餌を確保したりするまでには、たくさんの失敗がありました。^{※注3} 稚魚を病気から守り、早く大きく成長させる方法を見つけるためには、地道な試行錯誤を必要としました。

これらの困難を乗り越えて、2007年ようやく養殖に成功したと言えるまでになりました。柔らかくて美味しい「やすぎどじょう」を、大量に出荷できるようになりました。安来市のドジョウは現在、東京や北陸地域などのドジョウ料理専門店の他、全国の個人消費者に提供されるようになっています。

現在安来市のドジョウは、生産量で全国一位を争うまでに成長しました。しかしながら、大分県など養殖に取り組む地域は安来市以外にもあり、今後も高品質の「やすぎどじょう」を大量に生産する方法

を研究していく必要があります。また、ドジョウの生産量が少なくなる冬の出荷を増やすなど、技術改良が必要な面もあります。さらに、養殖をする農家の高齢化も大きな課題となっています。

「やすぎどじょう」の生産はまだまだ発展の途上であり、農家や やすぎどじょう生産組合および市の職員の人々の努力が続けられています



冬眠中のドジョウ

◇ドジョウの養殖状況 (2012年)

- ・養殖農家数 39戸
- ・養殖池面積 5.5ha
- ・生産量(2011年) 4.5t (全国第2位)

◇ドジョウの販売先

市内、東京、石川県をはじめとする全国の料理店及び個人消費者。



全国に出荷されるドジョウ

言葉の解説コーナー

※注1

「どじょう」は固有名詞として特定な場合に用い、「ドジョウ」は一般的に用いる表現。「やすぎどじょう」は安来市が商標(事業者が自己の取り扱う商品を他人の商品と識別するために、商品について使用する文字などの標識。)登録をしている名称で、「やすぎどじょう生産組合」は組織名称。

※注2

「やすぎどじょう」のブランド化…やすぎどじょう生産組合で生産されたドジョウを「やすぎどじょう」と命名し、高品質でおいしいドジョウというイメージを作って売り出そうという取り組みのこと。他地域の安いドジョウとの違いを際立たせ、よさを積極的にアピールし、安定的な売り上げを期待する。

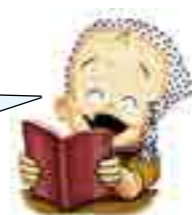
※注3

ドジョウの稚魚の口は他の魚より小さく、その口の中に入る餌の確保が難しい。安来市では動物プランクトンの「ワムシ」(大きさ約0.1mm)を必要なときに大量に発生させ、餌とすることに成功した。



ドジョウ料理を提供している人に作り方を教えてもらいたいね。オリジナルのドジョウ料理も考えてみたらどうかな?

ドジョウの養殖の様子を見学に行ったり、ドジョウ料理を作ったりしてみたいな…



(6) チューリップ栽培

春になると、安来市伯太町では色とりどりのチューリップが一面に咲き誇ります。地元の人も、伯太町を訪れた人も、多くの人々が目を見張る風景です。伯太町にチューリップが根付いた経緯や栽培農家の工夫を紹介します。



昭和42年頃に10軒の農家が裏作として栽培していた麦から、チューリップ栽培に転換しようという動きが起こりました。新潟県や富山県で裏作としてのチューリップ栽培が行われていたことを参考に、同じような気候の伯太でも栽培できるのではないかと考え、導入に踏み切ったのです。手探りの状態だった初期に栽培されたのは、「レッドマタドール」や「ケネディ」といった赤色が印象的な品種のものでした。

昭和55年ごろ「メリーウイドウ」というピンク色に白のラインの入ったやや小さめの品種を栽培したところ、気候条件や土壌等の好条件が重なり、他の地域では栽培できないほど発色の良いチューリップを栽培することができました。伯太町のチューリップはこの「メリーウイドウ」によって世に知られることとなり、伯太のチューリップをブランド化することに成功しました。この頃の最高生産高は1億2千万円あまりで、大きな経済効果をもたらしました。



チューリップ栽培は、10月下旬から11月上旬に植え付け・除草剤散布・追肥等を経て、3月下旬～4月下旬に開花期を迎えます。花が咲いた後は10日ほどで花を摘み、5月下旬頃に球根を掘り起こします。掘り起こした球根は、乾燥・選別を行い7月下旬までに出荷され、早いものは8月下旬には店頭並びます。

伯太町でのチューリップ栽培には、伯太の土壌を生かす「伯太配合」と呼ばれる肥料が開発され生産を支えています。また、毎年同じ土地でのチューリップ栽培は難しいとされていますが、収穫後稲作のため毎年水を張ることでチューリップの連作障害が回避され、生産性を高めているのも伯太町でのチューリップ栽培の特徴です。



チューリップの栽培農家は、何件くらいなのかな？
摘んだ花は、捨てちゃうのかなあ？

現在栽培農家ではチューリップの球根だけでなく、市場の多様な要求に応えるためにスイセンやヒヤシンス、サフラン、グラジオラスなど様々な花を栽培するようになっていきます。

球根を大きくするために、花を摘むのだから、まだ花に元気が残っていきそうだね。切り花として飾る他に、何か使い途はないかなあ？
町が元気になる「何か」を考えてみよう！



「町が元気になる！」と言えば…

チューリップまつり!!

チューリップ栽培開始から20年ほど経った昭和62年、栽培農家がそれぞれの圃場で栽培していたものを一箇所に集めて見本園のようにして栽培することを試みました。一面に花の咲くチューリップ畑の美しさから口コミで人が集まり、花の予約栽培や花の販売など経営も順調に発展しました。これをきっかけに平成元年から伯太チューリップまつりを開催し、2万人～3万人の来場者を迎えるほどに有名となりました。



どじょうすくいコーナー



子ども達に大人気のミニSL

たくさんの中学生や高校生がボランティアとして、まつりを応援してくれたよ。僕たちも参加できる町おこしだね。



コラム

安来の風物詩といえば、白鳥もいるよ！ 「白鳥ロード」周辺は絶好の撮影スポット。 白鳥が安来で羽を休める理由は？



安来に飛来するハクチョウは、コハクチョウという種類のハクチョウです。シベリアやオホーツク海沿岸で産卵し、ひなを育て冬に日本などにやって来て冬を越す、翼の長さが2メートルぐらいの大型の渡り鳥です。

ハクチョウは10月～4月にかけて、宇賀荘や能義の冬水たんぼ（冬に水のはってある田んぼ）などに飛来します。昼間は池や田んぼで水草を食べたり、田んぼに落ちている稲穂を食べたりして過ごし、夕方になると水のはってある田んぼへ移動します。夜間ハクチョウが水のはってある田んぼで過ごしているのは、野犬やタヌキなどが近づいた時に音などに気づきやすく、身を守るためにこの場所を選んでいると考えられています。以前は、夜間に米子水鳥公園に移動した白鳥が多かったのですが、冬水たんぼができ、夜の間、宇賀荘や能義の田んぼですぐす白鳥の数が増えています。

安来のハクチョウもふくめ山陰地方のハクチョウは、2つのコースでシベリアやオホーツク海の近くまで帰りつくことがわかっています。1つは諏訪湖（長野県）、瓢湖（新潟県）、屈斜路湖（北海道）などをまわって帰るコース。もう1つは、境港（鳥取県）からウラジオストック（ロシア）まで休むことなく13時間をかけて飛び続けるコースです。

ハクチョウのつがいは相手をかえることなく、同じ場所で冬を越すと考えられていますが、別々の地方で冬を越したハクチョウがつがいとなったときは、どこの地方で冬を越すのかは未だ解明されていません。



いつ頃から白鳥が安来にやってくるようになったのだろう？
「白鳥」で安来を元気にする取組はないかな？
みんなで話し合ってみよう！



地域の暮らしを豊かにしようと力を尽くした人、日本という舞台上で活躍した人、さらには活躍の場を世界にまで広げた人…私たちの故郷、安来からは多くの著名な人が、生まれ育ちました。

そして、いつの時代も、地域の人々の暮らしが安定し、さらに活性化していくことを願って、豊かな自然を生かした産業を発展させてきました。時代の流れや社会情勢の変動、自然環境の変化に対応しながら、より一層、私たち市民が心豊かな生き生きとした日々を暮らせるよう、産業の振興が図られていることがわかりました。

次の④「安来からの発信」と⑤「安来の未来を考える」の章では、安来を訪れた人が、「また、来てみたい」「もっと知りたい」と思える場所や、安来の魅力を伝え広めている取組を紹介します。また、この街で暮らす私たちが安来の素晴らしさを体感し、安来を大切に思い、安来をアピールし、元気作りに参加している様子などを紹介します。

これからの安来をより一層発展させ、私たち市民一人一人が安来を誇りに思って暮らしていける現在、そして未来をみんなで考えてみませんか？

和鋼博物館（安来）

和鋼博物館は、昭和21年（1946）に開館した和鋼記念館から、たたら製鉄、和鋼や日本刀に関する貴重な資料を引き継ぎ、平成5年（1993）に開館しました。和鋼・和鉄の歴史や技術、日本に古くか



ら伝わる日本刀の材料・技術などが紹介されています。和鉄・和鋼に関する博物館としては国内最大の規模であり、展示だけでなく地域文化の掘り起しを積極的に行い、その内容を企画展や特別展を通して伝えています。

「鉄」についての豆知識



鉄は中に含まれている炭素の量（焼き入れした時）で硬さが変わってきます。炭素の量が増えるほど硬くなりますがその分もろくなります。一般に炭素量0.02%以下を純鉄、2.1%以上（1.7%以上との区別もある）を銑鉄、その中間を鋼と呼んでいます。銑鉄は鋼作りのための素材として使われます。また溶けやすい性質を利用して鋳物などにも使われます。鋼は、叩いたり伸ばしたり、熱で処理することで、粘りや硬さを調節することができ、用途に合わせていろいろなものに加工することができます。鉄は大陸から伝わり、日本での製鉄は古墳時代の後期から盛んになったと考えられています。

その製法は土製の炉に木炭と砂鉄を交互に加え空気をたえず送風して木炭を燃やして鉄を作り出すたたら製鉄と呼ばれる方法でした。たたら製鉄によって作られる鉄を和鉄・和鋼と呼んでいます。和鋼は武器や武具として使われたり、権力を持ったものにとってその力を表すものであったりしました。また、鍬や鎌など農耕の道具であったり、木や石などを加工する道具として使われたりと、人々の暮らしに大きくかかわり日本の産業や文化に影響を及ぼしてきました。

富田城跡（広瀬）

安来市広瀬町にある月山(標高約190m)の山頂を中心とした、中四国最大級の山城です。周囲は断崖絶壁が多く、麓には飯梨川が流れ、自然の地の利を生かした難攻不落の要塞といわれていました。現在も大規模な曲輪や石垣、土塁、堀切などが残っており、その歴史的価値の高さから昭和9年(1934)、国の史跡に指定されています。



築城は1163年～1189年頃と伝えられ、承久の乱の後、出雲の守護が代々この城を居城としたと伝えられています。戦国時代になると、城主は尼子氏、毛利氏、吉川氏とかわりました。1600年、関ヶ原の戦いの後は、堀尾氏が城主となりました。



富田城は1611年、堀尾忠晴が松江城に移ることで廃城となりましたが築城から400年以上にわたって、山陰地方の軍事上の一つの大きな拠点であり今もなお中国地方における代表的な城跡として重要視されています。

足立美術館（古川）

足立美術館は横山大観の作品120点を中心に近代から現代の日本画、陶芸、童画など約1500点を所蔵する日本有数の美術館です。館内には郷土が生んだ陶工・河井寛次郎や、北大路魯山人の陶芸館もあり、年間50万人を超える来館者を迎える国内トップクラスの美術館です。また、5万坪の日本庭園は、庭園外の山や樹木、竹林などの自然物を庭園の背景として取り込む「借景」という造園技法を取り入れ、ダイナミックな造形美を織り成しています。「枯山水庭」「白砂青松庭」「苔庭」「池庭」など6つに分かれ、四季折々にその表情を変え来館者の目を楽しませてくれます。アメリカの日本庭園専門誌によるランキングで、初回の2003年から「10年連続日本一」に、フランスの旅行ガイドブックでは山陰唯一の「三つ星(最高評価)」として評価されています。



足立美術館の創設者は、どんな人？



足立全康は明治32年(1899)2月8日、能義郡飯梨村字古川(現、安来市古川町一美術館所在地)に生まれました。小学校卒業後、家の農家の仕事を手伝っていましたが、14才のころ木炭運搬の仕事をしたが、途中で炭の小売をすることを思いついて商売の道にすすむことに決めました。裸一貫から苦勞を重ね繊維関係、不動産関係など様々な事業を興し、商いに取り組みました。一方で全康は幼いころから日本画や庭造りに強い興味関心を持っていました。事業の傍ら日本画の収集を行い、美術品のコレクターとしても知られるようになりました。そして昭和45年郷土への恩返しと島根県の文化発展を願い、日本庭園と日本画の調和を基本方針とした財団法人足立美術館を創設しました。

安来節演芸館（古川）

平成18年1月にオープンしました。安来節保存会による生の安来節と、どじょうすくい踊りの「ちょこっと体験」ができます。隣接する「どじょう亭」には、地元で養殖されたどじょうを使った色々な料理があります。安来の名産品を扱うお土産処もあります。



加納美術館（布部）

故加納溥基により郷土の発展を願って、平成8年10月、生涯学習・文化活動の拠点となるよう建設されたものです。



溥基の父であり、画家であった加納莞菴の作品のほか郷土出身作家の彫刻等も併せて展示しています。また、溥基の蒐集による備前焼の中から国・岡山県指定重要無形文化財保持者の作品等と、鎌倉から江戸時代の古備前、そして岡山県出身の文化勲章受章者、小野竹喬、池田遙邨の日本画、また有名陶芸家数十人の茶の湯の名碗も展示しています。



ゲゲゲの女房の故郷（大塚）

「ゲゲゲの鬼太郎」などで有名な、漫画家・水木しげる氏の妻である武良布枝さんは、昭和7年（1932）に現在の島根県安来市大塚町の商家に生まれました。大塚町は、約150軒の家が軒を連ねる集落です。

布枝さんは著書「ゲゲゲの女房」で、「29歳で嫁ぐまで大塚が私の"世界"の全てだった」と語っています。大塚の町を歩くと、ドラマの安来編で登場した懐かしい昭和の風景がたくさん残っています。



安来市観光プラザ（安来）

2008年4月にオープンした観光交流プラザ「アラエッサ♪YASUGI」は、「出会う・集う・憩う」を演出する安来市の情報発信の拠点として建設されました。安来駅に隣接した安来市の玄関口であり、観光案内や特産品の販売といった観光情報発信と、行政サービスコーナーやギャラリーといった市民交流の機能を併せ持つ施設です。



上の台緑の村（赤屋）



標高330mの高台にあり、緑豊かな自然を生かしたキャンプ施設です。眺めがとてもよく、晴れた日には中国山地の山並、安来市街や境港、美保関まで見渡せます。キャンプ場、コテージ、バーベキューハウスなどがあり、家族や友人などで楽しむことができます。豚や羊、山羊なども飼育されており、動

物ともふれあうことができます。そのほか体育館や研修室を備えた研修センターもあり、研修施設としても活用できます。

やすぎ懐古館一風亭（安来）

やすぎ懐古館一風亭は、旧商家を一部改装した安来の歴史を感じさせる建物です。イベントや会合などで利用できる部屋があり、物品の展示即売や飲食も可能です。月ごと・季節ごとのイベントの開催や定期的な朝市での地域特産品の販売、刃物まつりでも好評な「包丁研ぎ」の開催など、利用する人がアイデアを生かして活用することができます。地域から全国への情報発信基地として、また、地域の人や訪れた人の交流の場として活用されることで地域の活性化がより一層図られることを願って整備されました。



道の駅あらエッサ（島田）

「道の駅あらエッサ」は安来市中海町の9号線沿いにあります。島根県の東の玄関口として平成23年4月にオープンしました。周囲の田園風景との調和を考えた、木造を基調とした平屋建てとなっています。



【情報コーナー】

安来や島根の観光施設やイベントなど訪れた人に役立つ情報がそろっています。電子看板で安来弁のトークも楽しめるように工夫してあります。



【JAやすぎ農産物等販売所「なかうみ菜彩館」】

地元安来産の木材を使用して作られた店舗で、地元の農家が生産した新鮮な農産物、農産加工品、中海圏域の特産物が販売されています。

【グルメ館「中海の郷」】

松江市内にあった古民家を移築して作った古民家レストランで、地産地消をテーマに、どじょうやタケノコを使った料理や、出雲そばなど安来市や中海周辺でとれた食材を生かした料理を提供しています。



「道の駅あらエッサ」には、安来市や中海圏域の特産物や観光情報などを県外から訪れた人々に広く知ってもらおうとともに、地域の人々の交流の深まり、産業の活性化が促進されていくようにという願いが込められています。オープン以来たくさんの利用者があり、平成23年度レジ通過数による利用状況調査では26万6千人という数が報告されています。平成24年12月にはフリースペースもオープンし、イベントやフリーマーケットなどに活用され地域の人々の交流の場としてより一層の活用が期待されています。

安来市の温泉

安来市には広瀬温泉、鷺の湯温泉、比田温泉の3つの温泉があります。それぞれ歴史が古く泉源の発見の経緯には様々な言い伝えがあります。温泉は長い歴史の中で地域の人々だけでなく遠く県外の人にもまでその効能が広まり病氣療養、健康増進、そしてそこに集う人々の交流の場として利用されてきました。

「夢ランドしらさぎ」、「ふれあいプラザ」、「湯田山荘」、「富田山荘」、「憩いの家」は旧安来市、広瀬町、伯太町の合併を機に安来市からの委託を受け『夢ランドしらさぎ振興事業団』が管理・運営を行っています。どの温泉も無料シャトルバスを運行し、温泉から遠く離れた地域に住んでおり、なかなか自分一人で来ることができないお年寄りが

毎日でも利用できるように工夫しています。温泉につかるだけでなく交流スペースで語り合い、時には大きな声で笑うことで利用者の健康福祉がより一層増進されるよう願いをこめて運営されています。

また、それぞれの立地条件や施設の特長を生かして、地域に根ざした温泉経営を心がけると共に宿泊・宴会・法要プランの工夫、ホームページや地域観光事業と連携した広報活動などを行うことで小さな子どもからお年寄りまでが気軽に利用でき、身近な地域だけでなく県外からの利用客も増えるよう運営努力を続けています。

【夢ランドしらさぎ】



さぎの湯温泉を泉源とする、弱アルカリ性の温泉です。平成9年4月にオープンしました。様々なお風呂に、ミニプール、宿泊施設、トレーニング室、研修室などもあります。

さぎの湯温泉は、白鷺が足の傷を癒したという伝説があり、戦国時代には尼子氏の御殿湯として栄えました。平成7年に新しく発見された湯温52度、毎分900リットルという西日本で屈指の豊富な源泉を利用しています。



【ふれあいプラザ】

「夢ランドしらさぎ」のとなりに平成15年にオープンしました。介護予防拠点施設として、高齢者の健康対策や交流拠点にしてもらう目的で作られました。館内には、いろいろな種類の浴室ゾーンと高齢者の生きがい活動や研修会議などに利用できる交流ゾーンを設け、市民交流の場としても活用可能です。隣の「夢ランドしらさぎ」とは廊下でつながっています。

—「さぎの湯温泉」の歴史—



その興りが、どれくらい前なのか？正確な資料は残されていません。ただ、尼子時代の地図や文献には「湯町」とあり、尼子の御殿湯として賑わったと伝えられています。その時代には、湯場は、現在の位置とは違い尼子の城下町で、現在の太平寺の地内にありました。



そのように歴史もあり、かつては、この中国地方を支配した、尼子の御殿湯とまでされていたこのさぎの湯温泉が、なぜ現在まで大きな発展を遂げなかったのか？その理由は、昭和の初期まで、この地に続いた「洪水」にあります。

記録にある最初の洪水は、寛文6年（1666）の大洪水でした。このために旧城下町は一掃され、富田川の流れを東に移動させてしまったほどでした。この結果、温泉も流失し廃墟となり、泉源も失ってしまったのです。その後、元文4年（1739）3月、広瀬藩の藩医であった岡田元杏が、古老の話を聞き、私財を投じて温泉の発掘を試したのでした。その結果、見事に泉源を発見し湯壺を露天にすえつけて入浴していましたが、再び度重なる洪水のために埋没してしまいました。そして、明治43年3月 田辺六左衛門が自分のたんぼで、排水工事をしていると、湯が湧き出てきたので、温度を計ってみると40度を越すほどの温泉が湧き出て、現在のさぎの湯温泉ができたのです。

その後もたびたび洪水があり、また砂地でもあることから、泉源が埋まったりしましたが、現在では、洪水の原因となった川の上流にはダムがふたつもでき、河川工事すすみ、そのようなことはなくなりました。とは言うものの、比較的浅い深度で、温泉の出るこの地は、10年に一度は、ボーリングを繰り返さないと、砂地のため泉源が埋まってしまう。このため、今までの100メートル程度の深度を1キロも深く掘りさげて「永久泉源」を作ることになりました。平成7年4月。その願いは見事に実現し、毎分600リットル。温度も52度という高温の温泉が湧出したのです。同年の10月にこれを運用開始し、現在では24時間つきのことのない温泉が惜し気もなく流れています。



【湯田山荘】

比田温泉を泉源とする100%天然鉱泉のアルカリ性単純放射能温泉。奥出雲町との境に近い山あいの宿です。切り傷、神経痛等に薬効が高いとされ、中国地方を代表する秘湯のひとつとして古くから多くの湯治客が訪れていました。宿泊施設や食堂、リラックスルームもあり、日帰りで利用する人も多くいます。



—比田温泉の歴史—



いつごろ発見されたかははっきりとはしませんが、文政年間のころ広瀬城下の湯田金十という人が川砂鉄の採集の仕事をしていたところ、たまたま温泉の出る所を知り、広瀬藩に届けたのが始まりといわれています。その後広瀬藩の役人が土用の丑の日に馬に乗って視察に来られたとき、つれてきた若い馬が突然滝つぼの中に飛び込んで溺死してしまいました。しかし不思議なことにその日から温泉の薬効が特に高まり、人々はその馬の精魂のためだとうわさしました。それからというもの土用の丑の日には非常に入浴客が多くなり近所の農家から桶を借り出して間に合わせたほどだったそうです。

また、この湯は腐りにくく自宅に持ち帰ってもしばらくの間利用することができる点でも他の温泉にはなかなか見られないことです。効能の高さは他県にも広まり昭和20年ごろには太平洋戦争当時陸軍の傷病兵の療養所として内定の計画（終戦で取りやめになった）もあったといわれています。



【月山の湯 憩いの家】

広瀬温泉を泉源とする源泉かけ流しの温泉で中国地方でも有数のナトリウム、カルシウム硫酸塩泉です。尼子経久の居城富田城があった月山の麓から湧出した温泉を利用して造られた共同浴場・休憩施設があり、地元の人が多く利用しています。



【尼子の湯 富田山荘】



お湯は、ふもとの泉源「月山の湯」からポンプで吸い上げ加温して利用しています。平成11年にオープンしました。尼子氏の居城富田城のあった月山にあり露天風呂からは広瀬の町並みや飯梨川を眺めることができます。宿泊施設や会議室も備えており、四季折々の眺めを楽しみに多くの方が訪れます。



安来の温泉をもっと、もっとPRできないかなあ？
先生、まずは「温泉巡りの体験学習」はどうか？

安来市では、どんなPRをしているのかな？ 温泉にまつわる伝説と絡めて考えてみるのもいいね。
温泉につかる体験は、家庭学習の課題にしよう！



古代出雲王陵の丘

荒島地区には弥生時代から古墳時代にかけて、古代出雲を代表する墳墓が多数築かれています。このことは古来この地域に大きな力を持つ豪族が生活していたことを物語っています。

安来市ではこの一帯を4つの公園として整備し、地域の人や歴史に興味を持った人が気軽に散策できるようにしています。



《各公園の古墳群》

つくりやま 【造山公園】

一造山古墳群一

国指定史跡。1号墳は大成古墳と並んで古墳時代前期の100年間において全国で一番大きい方墳で、一辺が60メートル、高さ5メートル、2段構造が特徴です。このような大きな規模の古墳を作るためにはたくさん的人力が必要です。このことから葬られた豪族の権力の大きさを伺うことができます。



しみずやま
○清水山1号墳【中期】…2段築成の方墳(42m)です。

ほどけやま
○仏山古墳【後期】…大成古墳と同じ丘陵に築かれた前方後方墳(50m)です。豪華な副葬品が出土しています。

たかつかやま
○高塚山古墳【後期】…石棺式石室の一部が露出しています。

じゃこづか
○若塚古墳-古墳時代終末期に築かれた石棺式石室です。

○塩田横穴墓群【後期】…荒島石の岩盤を掘り込んだ横穴墓で有力民衆の墓です。

なかやま
○中山墳墓【消滅】…荒島石製の家形骨蔵器が納められていました。奈良時代～平安時代にも有力者がいたことがわかります。

しおつやま
【塩津山公園】

—塩津山墳墓群—

国指定史跡。6・10号墓は県内最大級の四隅突出墓で、一辺30m以上、突出部を含めると40mにもなる大きなものです。出雲市の西谷墳墓群にも同様に大型のものがあり、このことから弥生時代後期には、出雲地方の東西に2大勢力があったと考えられます。1号墳はこの地に最初に造られたと推定される古墳時代前期の古墳で四隅突出墓の名残りを残しているのが特徴です。山陰自動車道のトンネルの上に、築造当時の姿に復元されました。週末にはライトアップもされています。



みやま
【宮山公園】

—宮山墳墓群—

1号墳（消滅）は全長60mの出雲で2番目に大きい前方後方墳です。古墳時代中期に築かれ出雲に前方後方墳が流行する先駆けとなった古墳でした。4号墓は弥生時代後期に築かれた中規模（18m、含突出30m）の四隅突出墓です。現在、作られた当時の姿に復元整備されています。



ちゅうせんじ
【仲仙寺公園】

—仲仙寺墳墓群—

国指定史跡。もともと19基からなる墳墓群でしたが、現在では2基の四隅突出墓が保存整備されています。8～10号墓は中規模（18m、含突出27m）の四隅突出墓ですが、昭和40年代に発見され、四隅突出墓の存在を全国に広めた存在として有名になりました。



なかうみマラソン

現在の安来市は平成16年に旧安来市・広瀬町・伯太町の1市2町が合併して新制安来市としてスタートしました。合併直後の市役所では「何か合併の記念になるようなイベントをしたい」と話し合われており、「安来でマラソン大会を開催しては



どうか」という提案がありました。ちょうど平成17年に福井地区と安来港をつなぐ道路、通称「湾岸道路」が開通予定でした。このルートは海岸沿いで果樹園、竹林、小島などの様々な景色を楽しむことができます。このような条件がそろって2005年第1回目のマラソン大会が開催されました。大会名の「なかうみ」にはこれからは一つの市だけではなく中海圏域全体でその存在感をアピールしていかなければという願いとねらいが込められています。安来市で行う大規模なマラソン大会でありながらあえて大会名に「やすぎ」をいれませんでした。こうして始まったなかうみマラソンは地域（市民）の健康作り、スポーツの振興、安来市からの情報発信、中海圏域（松江市・安来市・米子市・境港市の4市）の情報発信と圏域住民の一体感、県外に向けての中海の魅力発信を目的として毎年開催されています。第1回目約2500人だった参加者数も第8回目（平成12年）には約5500人となり、遠く県外から参加する人もいます。親子マラソンの部、ウォーキングの部なども設け幼少期の子どもから中高年まで気軽に参加できるようしたり、参加者には大会オリジナルグッズ、ドリンク、観光施設割引券、温泉入浴券、味噌汁サービスを行ったりするなど大会運営も回を重ねるごとに工夫されています。



今では全国紙のランニング専門誌にも取り上げられるなど山陰最大規模のマラソン大会として定着しました。平成24年の第8回大会の参加者は、5,479人でした。

5 安来のこれからを考える

これからの安来を
考えよう

安来の歴史や偉人、産業、町おこしについて、学んだり、考えたりしてきたね。今までの「安来の歩み」を大切にしながら、これから、『みんなが助け合い、支え合って安心して暮らせる安来』にするためには、どんなことを大切にしたいか考えてみよう。



子どもからお年寄りまで気軽に集まれる場所があるといいな。



安来にもっとたくさんの人に来てもらいたいな。

いろんな国の人たちが来てくれて、楽しく交流できる安来にしたいな。



安来の祭や豊かな自然、歴史・文化を生かして、魅力あるまちづくりができないかな？

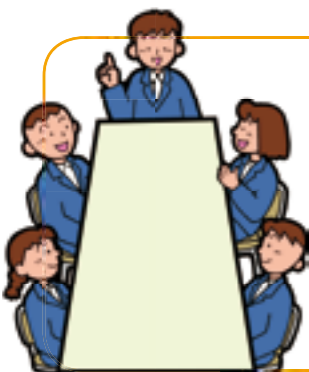


安来で働きたいと思う人が増えて、その人達がみんな、地元で就職できるようになるといいな…

安来の豊かな自然や美しい景観を守るために、僕たちも努力を忘れてはいけないね。



地域行事やボランティア活動に参加した人もいいよ。体験してみて、どんなことを考えたかな？



君たちも、「これからの安来」について考えてみよう。意見文を書いているのもいい。職場体験学習で学んだことなども参考にすると、考えが広がったり、深まったりしそう。パネルディスカッションやディベートもおもしろそう。また、安来市では「元気・いきいき・快適都市 ～自活と共助のまち・やすぎ～」を目指したまちづくりをしているんだ。興味のある人はインターネットで「安来市総合計画」を調べてみよう。



アクション!!
~これからの安来のために~



各中学校では、ふるさと安来のためにいろいろな活動をしているから、一部だけど、ここで紹介しよう。これからも、積極的に参加しよう。学校ごとだけではなく、一人一人が、自分にできることを考えて、行動できたらすばらしいね。

安来駅前清掃
ボランティア
(安来一中)

呼びかけに応えた生徒一人一人が、安来の玄関と言われる安来駅を掃除します。

参加者の感想

毎日、通勤する人が使われるこの安来駅はとても汚れているため、一生懸命に掃除をしないと、なかなか汚れが落ちません。また、範囲が広いので、協力してやらないと時間内に終わることができません。

しかし、地域の人達が協力してくれるため、地域の人たちとのコミュニケーションがとれ、とてもよいボランティアだと思います。





修学旅行での安来市PR活動大成功

生徒の感想

緊張したけれど、みんなしっかりと笑顔で頑張ってくれて終わってからとても気持ちよかったです。この活動で安来をいろんな人に知ってもらえたら嬉しいです。



観客の声

私たち夫婦は島根県の雲南出身で、懐かしくて涙が出そうになりました。ありがとうね。



感想

私たちが行った車いすふきは、洗剤、細かい所のための歯ブラシ、そして福祉士の方々のもう着なくなった服をぞうきんの形に切ったものを使ってそうじをした。それらを使って細かい所まできれいにふいていく。みんな真剣な表情をしていた。ふいている時、食べ物のかすなどがみられ、施設の方々はこちらの車いすを毎日のように使っておられることがわかった。私たちがふいてきれいになり、使いやすくなった車いすをこれから使ってほしいという気持ちになった。車いすふきが終わった頃、ある一人の施設の方に「だんだん。」と笑顔で言われた。その時はとてもうれしかったし、心が温かくなりやりがいを感じた。ボランティアは人の役に立つことや、人を支えることなどのためにするから、人に感謝されると心がおだやかになったり、最後に達成感がある。それが、ボランティアのよさではないかと思った。そして、福祉士は重労働でも笑顔で感謝されると、私のような思いになるから続けられる職業ではないかと教えてくれた。



地域で働く先輩に学ぶ 広瀬中



お礼の手紙

私は、何度か失敗をして、その都度ずっと一人でクヨクヨしていました。けれど、〇〇さんの話を聞いて、もっと自分らしく堂々としていようと思ったし、〇〇さんが言っておられた「自分を好きにないなさい」という言葉を忘れずにこれからも頑張りたいと思いました。

お礼の手紙

〇〇さんと奥さんのお話を聞いて、地域の文化について、もっと知ることの大切さや仕事をしていながらできた貴重な体験がよくわかりました。三味線や歌も聴けて、本当に嬉しかったです。



発酵食品ってすごいなって思いました。しょっぱいものをたくさん入れて大丈夫かと思いましたが、豆腐につけるととてもおいしく…。

店で並んでいる商品に「手作り」ってあっても気にも止めなかったけれど、「手作りのおいしさを知りました。



大切にしたい想い ～ふるさどを見つめて～



最後に紹介するのは、平成21年に東京で行われた第31回「少年の主張全国大会」で審査委員会委員長賞を受賞した、広瀬中学校3年生の田邊光さんの弁論です。気持ちのこもった力強い論調で聴衆の心を打ち、賞状を授与される際には、審査委員長の松本零士先生が「ふるさとを限界集落にしないようがんばってください。」と声をかけてくださったよ。

故郷を思って

広瀬中学校3年 田邊 光

限界集落、その言葉を聞いて何を思いますか、きっとただならない雰囲気だけは伝わると思えます。限界集落とは、六十五歳以上の高齢者が半数を超え、村落共同体としての機能が果たせなくなり、消滅の恐れがある地域のことです。僕は、初めてこの言葉を知ったとき、自分の育ったところもそうなりつつあるのではないか、それなのになぜ誰も手を打たなかったのか、放っておいたのかと一人憤っていました。

僕の故郷の比田は、山々に囲まれた美しい高地ですが、過疎化により、失われつつあります。二つの小学校が一つになり、この五年で児童数は約半分にまで減少しました。三年前には中学校もなくなりました。このままでは、比田は多くのお年寄りと少数の子どもだけになってしまいます。

では、なぜ比田は過疎となったのでしょうか。なぜ人は減り続けるのでしょうか。働くところ、病院、文化施設、大型店などがなく、生活が不便だということが考えられます。買い物一つするにしても時間がかかり、生活に負担が加わります。実際、僕たちがバスで中学校に通うにも一時間二十分もかかることもあります。これからも、比田をすてて外へ出てしまう人達が増えるのではないか。このまま過疎が進んでゆくことをもどかしく思い苛立っていました。

そんな僕に、希望を取り戻すきっかけを与えてくれたのは、比田の自然の美しさでした。今年の六月頃、友達と二人で猿隠山に登り、天に近づいて空と一体になったかのような感動を味わった帰り、山の中の水溜りに無数のオタマジャクシが必死に生きようとしている姿を見たとき僕は思い出したのです。何もしないどころか比田には頑張っている人がたくさんいることを。

僕は毎年、春夏秋に家の農業を手伝っています。それは、田畑の草取りや肥を撒く仕事です。家族一丸、幼い妹たちも手伝います。一日中働き、疲れて家に帰ると、「ほれ。」と言って祖父が財布からお小遣いをくれます。そのときの祖父の顔はとても優しげです。きっと祖父は、自分の育った場所に僕たちがいて、昔からある農業を受け継いでいることがうれしいのだと思います。

祖母は比田の婦人たちと一緒に笹巻きなどを作って売っています。毎朝五時に家を出なければならないのは辛いと思いますが、「地域活性化のためだわい。」と頑張っています。祖母は比田の希望の灯を消すまいと思って必死になっているのだと思います。そのほかにも、小学生のためにそば畑を貸して下さる方々、もの作り教室で竹とんぼの作り方などを教えて下さるおじいさん達、無形文化財である比田踊りを残そうと努力している人たちもいます。その姿を間近で見、自分も一緒に参加し、汗を流してきたのです。それなのに比田の過疎化を止めるために誰もなにもしていないだなんて、なんと愚かだったのだろうと気づきました。

僕は、僕を守り育ててくれた比田と、そこに住む人達の心を受け継ぎたいと思います。不便な中でも、互いに助け合い、支え合うことのあたたかさを大切に、比田の生活がよりよいものになるよう、今まで以上に農作業や文化祭などの地域行事に積極的に参加します。

僕は、ふるさを限界集落などにはさせません。

「東比田を大切に“築こう地域の絆を！”」
この言葉をスローガンに、東比田の人たちは、泥落としフェスタ、愛宕祭典など、地域を元気にするためのイベントに一生懸命取り組んでいるよ。まるで、光君の弁論に背中をおされるように。



わたしたちのふるさと「安来」…

小学校から中学校の9年間で、ふるさとを知り、ふるさとを学び、ふるさとを考えていきます。「大好き！やすぎ!!」という思いを、多くの仲間たちと共有したいと思います。

●資料提供と協力者（順不同）

島根県
安来市
八雲立つ風土記の丘
足立美術館
加納美術館
安来節演芸館
JAやすぎ
夢ランドしらさぎ
湯田山荘
富田山荘
月山の湯 憩いの家
市内中学校

●参考にした文献

「安来市誌」
「安来市地誌」
島根大学教育学部共生社会教育人文地理学研究室
「島根県歴史人物辞典」
山陰中央新報社
「明治百年 島根の百傑」
島根県教育委員会
「紙塑 青戸 慧 作品集」
五彩会
「わたしたちのふるさと安来」
安来市教育委員会・小学校社会科部 編
「松江・安来の歴史」
郷土出版社
「安来市酪農農業協同組合 40 周年記念誌」
安来市酪農農業協同組合

安来ふるさと読本

平成25年3月発行

【編集・発行】
安来市教育委員会
安来市伯太町東母里580

【制作・印刷・製本】
有限会社 太陽平版

